

---

## 国芳の「背面肖像」における地獄表現の解釈

---

近年、歌川国芳（1797～1861年）に関しては広角的な研究がなされ、多様な作家像・人間像が提示されている。中でも関心をひかれるのは、国芳の「背面肖像」とも称すべき後ろ向きの自画像についての研究だが、国芳が自画像において「後ろを向き、顔を描かない」という事実を焦点をあて、以てその人間像に迫るという研究も提出されている。とは言え、現在のところ、国芳が何故そのような表現に固執したのか、あるいは、そこにはどのような意味付けがなされるべきか、という問題については、本質的な結論を出し得ていない。しかし、この背面肖像の検討こそ、国芳の制作態度のみならず、その人間像を論ずる為には不可欠であると考えられる。

国芳については、日本の彫物文化に多大な影響を与えた、俠気の士としての人間像が定着している一方、その創造および想像力の根本には、国芳が傾向として有した、衣裳を皮膚として、また皮膚を衣裳としてイメージする、病的に洗練された皮膚感覚が存在している。してみれば国芳が、自身の姿を描くに際し、多くの場合において衣裳の図柄が強調される背面肖像を描き、また通説として、その意匠に地獄絵を配した地獄模様の衣裳を、自身を表す標章として積極的に用いた事は、極めて重要な意味を持っていたと指摘出来る。

その意味で重要な作品が、《国芳もやう 正札附現金男唐犬権兵衛》（1845年）である。本作の重要な点は、画の中に「後ろを向き」「地獄模様の衣裳を纏う」という、国芳における自画像の特徴を有した唐犬権兵衛の姿から、また、その他の地獄模様の衣裳を用いた複数の背面肖像と、本作の制作時期とが一致する事から、この作には少なからず国芳の自画像的意味が仮託されており、加えてその様態が、「地獄太夫」を思想的源泉としていると考えられる点だ。

《唐犬権兵衛》は《国芳もやう 正札附現金男》連作の一つであり、この連作のうちにある《野晒悟助》（1845年）は、作・山東京伝、絵師・初代歌川豊国による『本朝酔菩提全伝』（1810年）において、地獄太夫の兄として登場する人物である。而して国芳が地獄模様の衣裳を好んで自身の標章として描いた背景に、この小説との関係性は無視しえない。不運に遊郭に売られた地獄太夫は、その苦しみも前世の不信心とし、懺悔の為に地獄模様の衣裳に身を包み、死後はその遺体を晒して、人々へ無常を諭したという。

本発表では、他作品との比較検討の上で、国芳が上記作品をはじめ、自身の背面肖像に繰り返し描いた地獄模様の衣裳が、この地獄太夫の像を意識的に引用したものである事を論証する。そこには、幕末動乱の時代に生きた国芳の、死と無常を所与のものとし、それ故に生きる事を倫理的実践として捉える人間性があり、それは従来強調される事の無かった国芳の一面である。国芳は、背面肖像という特異な表現を用いる事によって、その死生観を強く主張したと考えられる。